

## 6. 三谷の家屋

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2017-10-03<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 古原, 孝子<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/2297/4994">http://hdl.handle.net/2297/4994</a>                           |

## 6. 三谷の家屋

古原孝子

- I. はじめに
- II. 三谷地区の伝統的家屋
- III. 生活の変容と、それにともなう家屋の変化
- IV. おわりに

### I. はじめに

三谷地区には、昔建てた家に手入れをして、今も住み続けている家が何軒もある。訪ねて行って中へと通してもらおうと、部屋の広さや柱の立派さにとても驚いた。調査の中で聞き取りを進めるうち、三谷の家は以前はどこかの世帯でも類似した間取りの家に住んでいたということが良く分かり、家やその住みかたの時代による変化にも興味がわいた。私の実家は長野県にあるのだが、近所で似たような間取りの家など見かけたことがない。第一、古い家が全くと言って良いほど残っていないのだ。

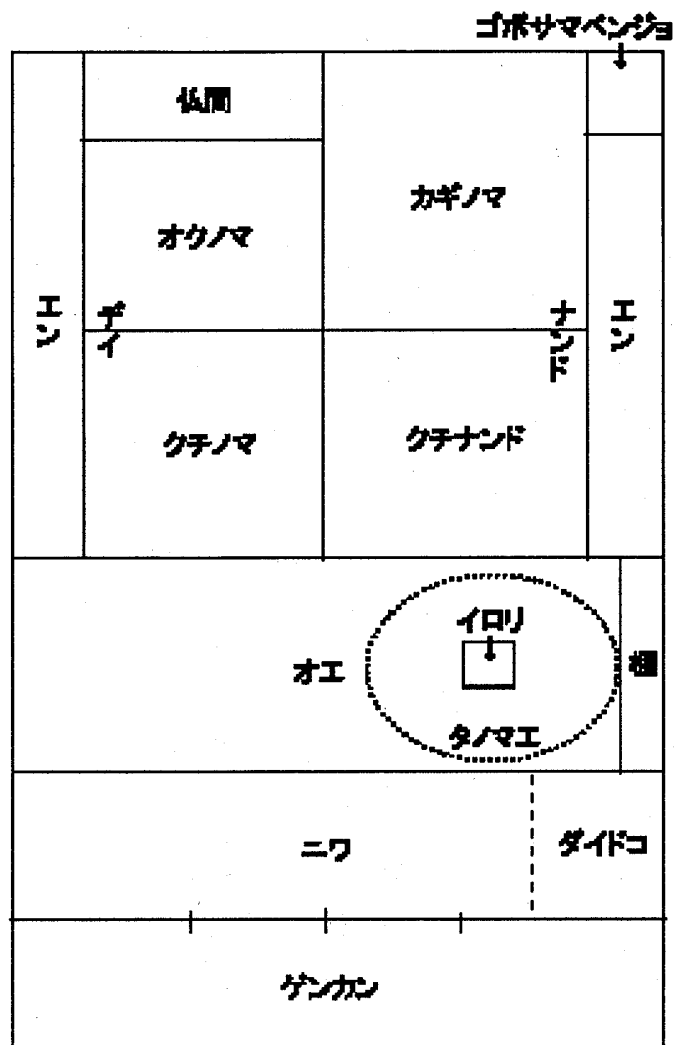
家の造りには、住む人の暮らしぶりやものの考え方が反映され、それは時と共に変化していく。この章では、生活様式や価値観の変化が、三谷の家屋にどのような変化をもたらしたかについて考えて見たいと思う。

### II. 三谷地区の伝統的家屋

間取りの説明に入る前に、この伝統的な家屋に住んでいた人々の暮らしぶりについて述べたい。

まず家族構成は、典型的には老夫婦・若夫婦・若夫婦の子どもの3世代が同居していた。子どもは複数で、5人キョウダイの世帯などがあり、生業として稲作・畑作・林業・養蚕・油桐の実の採取などが行われていた。冠婚葬祭や持ち回りで行われる地域のお講は「四つ柱にして」自宅で行われ、区の寄り合いも区長宅のオエ（後述）で開かれていた。

図1 三谷地区の伝統的家屋



続いて、ここで言う“伝統的家屋”について述べる。(図1参照)これは一例であるので、個々の家で間取りに多少の違いがあることを断っておく。この形式の家屋が新築されていたのはおよそ1960年前後までで、増築・改築で手入れをされて面影を残す家は現在でも何軒か見られるものの、そっくりそのままの間取りで残っている家は無い。

基本構造は4部屋をもつ奥行きのある構造で、手前から順に、ニワ、オエ、その奥にデイとナンドが並んで配されている。デイとナンドは、それぞれが二分割され、クチノマ、オクノマ、クチナンド、カギノマとされる。その4部屋で「田」の字型をなしていることから、このような構造を持つ家は一般的に「田の字型」と呼ばれていて、これはインフォーマントの方々からもよ

く聞いた呼称である。そして、ニワの前にはゲンカン、デイとナンドの横にはエンが設けられている。

家屋の中にある仕切りはすべて取り外し可能な襖や板戸であったので、冠婚葬祭や持ち回りのお講などを催す際には、それらを取り外し、「田」の字型を「口」の字型にして(「四柱にする」という)大人数が集まれるようにしていた。可動式の壁はこのように便利な面もある一方で、冬には隙間風が入り、一部屋の区切りも大きかったために、寒さが厳しいという側面もあった。ストーブが出回る以前は、暖をとれるものはオエのイロリのみで、床下は空いていたので下からの冷え込みが厳しく、冬場には床下に藁を詰めてふさいでいたという家もあった。

また、固定された壁が多くないことから、押入れなどの収納スペースがほとんどと言って良いほど無い。布団はしまわずに万年床で、服や客用布団などは、離れとして建てられていた農機具などを収納する小屋(アキ小屋)や、土蔵にしまっておかれた。

家の間取りに大きく影響を与えていると考えられる要素が、仏間の位置である。仏間はデイの奥に造られているのだが、いろいろな人から話を聞くうちに、「仏間はデイの奥にある」というより

はむしろ「仏間があるから、こちらがデイで、あちらがナンド」と言ったほうがしっくりくるような感じを受けた。仏間の位置が影響しているのは、オエにおけるイロリ・棚の位置と、ニワにおけるダイドコの位置であり、どちらも仏間とは反対側に設けられている。仏間やその位置の重要性については、考察で述べたい。

使われている建材は、自分が所有する山から切り出してきたという世帯が多かった。以前は林業は三谷の主たる産業の1つであったためであろう。山から切り出してきた木は、歪みや割れを防ぐために、乾燥させながら何度も製材したという。ケヤキを使ったという家では、製材を3度行い、木の切り出しから家屋の完成まで3年かかったと聞いた。

また、家屋を見ればその世帯の経済状態がおおよそ見て取れた。使われている木材や、欄間の装飾、オビト（帯戸）等に、違いが表れるからだ。因みにオビトとは、赤く塗りが施された、周囲や中央に黒い帯状の部分がある板戸で、オエとデイ、ナンドの仕切りなどに使われる。一般的な襖よりは大きく、立派な戸である。

以下では、間取りのそれぞれの部分について、役割や細かい部分について述べる。

## 1. ゲンカン

ニワとは高い敷居と大きな引戸（サイズは6尺四方、1尺は約30センチメートル）で隔てられており、建物の外にある部分となっている。そのため壁には囲まれていない。後述のニワの延長として、農作業場として使うなどされていた。

引戸は、建物の中に向かって仏間がある側の戸がサンジャクド、もう一方がオオト（大戸）と呼ばれている。通常はオオトだけを明け、サンジャクドは閉め切りとなっているが、葬儀の時のみ開かれた。また、オオトは嫁が朝一番に開けるものであったため、遅くなくても開けられていないと「あの家の嫁はまだ寝ている」と言われたという。

## 2. ニワ

広い土間で、家への上がり口の段差には、ハマイカ（浜床）という幅広の厚板が付けられている。ある家では、その幅は凡そ40センチほどであった。現代の一般的な住宅の玄関の中と比べると三和土の部分が相当広くとってあるのは、農作業場として使われていたためである。具体的には、稲の脱穀・糶摺り・精米が行われていたほか、糶や米、油桐の実（この地方の特産物の1つ）などの農産物の貯蔵場所としても使われていた。雨の日や農閑期の仕事場は専らニワであったので、農家にとっては重要な場所だったと言える。

また、前述の通り、仏間とは反対側のニワの隅にダイドコ（台所）が設けられている。土間に石を敷いたりなどした上に、流しや調理場が設けられ、かまども併設された。流し台は背の低い「下流し」で、女性はかがみ込んで仕事をしなければならなかった。使用する水は、自前の井戸から汲

み上げるか、山から引いてきた水を使用していた。これよりさらに時を遡るとダイドコ自体が無い時代もあった。

センチャ(=トイレ)、風呂もニワにあった。その場所については世帯によりまちまちだが、大方がダイドコと同じ方の隅に並べて作られていた。センチャは汲み取り式で、石をくり抜いて作った便壺に溜まったものは、肥やしとして役立てられていた。風呂は、初期が木桶のような浴槽で、後にゴエモン風呂(地獄風呂という呼称もあり)へと移行した。しかし、日谷では共同の風呂があったため自宅に風呂を持つ世帯は無いに等しかった。

こうして見ると、地面とそう高さが変わらない位置に調理場があり、その近くにセンチャや風呂もまとまって作られていたため、衛生状態は良いとは言えない状況であったと思われる。

### 3. オエ

イロリがあるためにオエの上は吹き抜けとなっており、煙抜きの煙突がついていた。また、相当広い板間で、初めて目にした時には驚いた。あるインフォーマントの話では、30畳ほどはあるのではないかということだった。以前は、寄り合いは区長宅のオエで開かれていて、60人ほどの大人が一堂に会していた。

イロリの位置は、オエの真ん中ではなく、前述の通りに仏間とは反対側寄りとなっている。家族が家の中で普段過ごす場所、つまり今で言う居間のような場所は、イロリの周囲であった。食事をする場所もここで、イロリに近い方の壁には箱膳をしまうための棚が作りつけられていた。そのためか、このイロリの周囲の生活空間は「タノマエ」(棚の前)と呼ばれる。タノマエの範囲は、オエの中で仕切りがされているわけではなかったが、意識の上ではかなり明確に線引きがなされていたようだ。

三谷には1945年頃まで養蚕を営んでいた世帯があり、その家ではデイとナンドの2階部分や、オエ、デイなどで春から夏にかけて蚕を飼っていた。

### 4. デイ

仏間の手前側にある2間の総称で、普段は使用しない。使用するときだけに畳を敷き、普段は部屋の隅にまとめて積み上げてあった。クチノマ(口の間)とオクノマ(奥の間)は使い方などの上でそれほど明確な区別が無いようで、まとめて単に「座敷」と呼んでいる例も見られた。世帯ごとの報恩講(ウチボンコ)の時や、出産祝いなど、多人数が集まる時に、この2間を続けて使う。また、前述の通りに蚕を飼う場所として使用する場合もあった。この時には畳は敷かない。

### 5. ナンド

デイの横にある2間の総称で、ナンド(納戸)とは言っても、ものをしまっておく場所というわけではない。クチノマ、オクノマとは異なり、クチナンド(口納戸)とカギノマ(カギの間)には明確な区別があった。

クチナンドは使用頻度の高い部屋である。よって、畳敷きではなく、板間に藁を敷いた上に、ゴザをしいて使用していた。インフォーマントの中には、家族がここで寝起きしていたという人や、茶の間のようにして使っていたという人がいた。

カギノマは、普段は使われない。来客時には客の宿泊室、報恩講の時には僧侶の控え室兼宿泊室として使用された。また、この部屋には床の間が設けられた。

## 6. 仏間

畳敷きで、床面が家中で一番高くなるように作られている。三谷の人々は、西本願寺派と東本願寺派の違いはあれども、ほとんどが浄土真宗の門徒だ。仏壇はどこの家のものも大きく立派で、正面から見た大きさは畳1畳分よりも大きい。他の部屋より高い仏間に更に壇を置き、その上に仏壇が置かれている。また、火事などの非常時に仏壇をすぐに運び出せるよう、仏間の後ろが戸になっているという家もあった。

主だった部屋は以上だが、他にエン、ゴボサマベンジョがある。エン（縁）は通路で、いわゆる縁側のようなものだ。ゴボサマベンジョは僧侶専用のトイレで、家の人は絶対に使用しなかった。年に数回しかやって来ない僧侶のためだけのトイレが設けられていることから、宗教が三谷の人々に深く根ざしていることがうかがえる。

2階は、オエの上は吹き抜けとなっているため、デイとナンドの上の部分だけである。きちんとした部屋にはされておらず、養蚕を行っていた家では蚕を飼い、それ以外の家では薪や炭などを置く物置として使われていた。

また、家の中の様子であるが、近隣の人々の行き来が頻繁であったため、家の中に家族以外の人がいるという状態はよくあることであった。

このようにして見てくると、三谷の田の字型家屋は、総じて人が集まることを念頭に置いた家であると言える。本来私的な空間であるはずの家が、公の面を重視した空間となっているのだ。

家族が普段の生活で使用する空間は、タノマエとクチナンド、ニワ、仏間が中心であり、家屋全体が広い割にはそれほど多くはない。そのように普段使いに出来る場所が少ないため、家族全員が顔を合わせる時間が必然的に多くなる。また、寝る場所も限られていることから、プライバシーの保護が以前はそれほど重要な問題でなかったことが分かる。

生活する上での利便性の面からみても、寒さの問題や収納スペースの問題など、通常の生活で必要度の高いものを犠牲にするような形で、四柱にして広い空間を確保するという公の面を優先した構造となっている。言い方を変えるならば、家族が暮らす私的な空間であるということによって生ずる公への閉鎖性が希薄な家屋であるだろう。ガイドコやトイレなど、生きていく上で根本的な部分に関わる場所が、広い家の隅のほうに作られていることからそう見て取れた。

### Ⅲ. 生活の変容と、それにともなう家屋の変化

Ⅱ節で述べた家屋の形態は、現在までにさまざまな変化を遂げてきた。田の字型の原型を留めた状態で住み易いよう手を加えて現在まで至った家もあれば、建て替えによって根本から変わった家もある。この節では、その変化が起こった要因と変化の様子を、具体例も挙げながら見ていきたいと思う。

#### 1. 変化の要因と、それがもたらした変化

変化の要因には、家屋の老朽化やインフラ整備などの構造的要因と、生活様式や価値観の変化などの社会的要因がある。これらのそれぞれについて考えてみたい。

##### (a) 構造的要因

まず挙げられるのが、寒さやダイドコの衛生面の問題など、伝統的家屋が抱える不便さである。これを改善するため、改築や増築などが行われた。長期にわたって様々なところに手入れをしていくために、時期にはばらつきがある。聞き取りをしたところでは、戦後くらいから手入れを始めたという家があった。当然建て替えをすれば増改築の必要はなくなるが、現在でも伝統的家屋に住み続けている家では、今でも必要があれば手入れをして暮らしている。

以下に具体例を挙げる。

- ・ 板戸、障子の一部をガラス戸にした。(戦後)
- ・ 「生活改善」という声のもと、衛生面に配慮してダイドコとセンチャを区切った。(1950～51年頃)
- ・ ダイドコを改築して拡張し(「リヤを出す」という)、高流しにした。(1957年頃)

まず、板戸や障子の一部をガラス戸にしたという例では、寒さを防ぐという目的と、光を取り入れるという目的がある。ガラス戸は障子よりも気密性が高く、板戸にすると光は取り入れることができないが、ガラス戸ならば光が通るからである。インフォーマントの1人は、以前は家の中が暗い上に寒かったと言っていた。

衛生面では、前述したとおり、ダイドコとセンチャ、そして風呂が狭いスペースに隣り合って造られており、衛生的と言えない状況にあった。そこで、それぞれを区切ることによって衛生面の問題を改善し、ダイドコについては土間であったところに床を張った上で、拡張して十分な面積をとることによって高流し(脚のついた流し)を置くことができるようにした。同時に、それまでは流しの横のわずかなスペースが充てられていた調理場も、まとまったスペースが確保された。ダイド

コの拡張については、何度も増改築を繰り返したと言っていたインフォーマントが複数いた。その理由のひとつが衛生面の問題で、他にはインフラ整備や電化製品の普及などが挙げられるが、それらについては次で触れる。

センチャは、以前の汲み取り式から、簡易水洗や浄化槽を用いた水洗式へと変化している。簡易水洗は、汲み取り式に水が流れるようにして、便壺の上に開閉式の蓋をしたものだ。この簡易水洗の問題点はすぐに便壺がいっぱいになってしまうことだという声が聞かれた。浄化槽は20年ほど前から使われるようになり、川沿いに埋められている。また、曾字では2003年の時点で下水道工事が進められている最中で、それがすんだら水洗化がなされるということだった。

上にあげたような、家屋の中での不便さもあったが、立地上の不便さもあった。三谷地区は谷間にある集落であり、谷の奥に住んでいると大聖寺までの距離が遠くなるなどの不便さがあった。私も実際に歩いてみて分かったのだが、谷の奥のほうに行くほど道幅も狭くなっていた。このことから、谷の奥に住んでいた世帯が、谷の口の方へ引越しをするというケースが見られた。その際には、町内の人の協力を得て谷口の方の土地を売ってもらったという。古い家は解体して作業場として移築した世帯や、そのまま残しておいて貸家になっている家があった。後者の場合、若者の流出が続く三谷で借り手が見つかるのだろうかと思ったが、山に囲まれた静かな環境、味のある古い木造家屋に惹かれた芸術家などが入居しているということだ。

次に、ガスの導入や上水道の整備などのインフラ整備や、電化製品の普及など、それまでは無かったものの導入が挙げられる。これらの変化は主にダイドコや風呂場の変化に関する。まず、新しいものを導入する際には、それに合わせて家に手を入れなくてはならない場合がある。そして増改築のきっかけとなるのだ。

ある家のダイドコを見せてもらっている時に、何度も拡張を重ねた跡を目にする機会があった。流しと僅かな調理スペースだけの状態から、テーブルが入るほどの広さになり、その後、冷蔵庫をはじめとする電化製品が置ける現在の状態になっていた。また、最近ではシステムキッチンも導入されている。

水回りについては、昔は井戸を使っていたが、そのうちに近隣の家と共同で山から水を引いてきて使うようになったという。その時に水道の蛇口を付けたので、平成になってから上水道に切り替える際には、特に大きな工事は必要なかったという話だった。利用している水については、すべての家で完全に上水道のみに切り替わっている訳ではない。上水道は手取川から取水しているために、水道料が高いというのが理由である。今でも井戸水を使用しているという家、屋外で使用する水（例えば洗車など）は山の水を使用しているという家など、上水道と他の水を併用している家があった。

風呂にも変化があった。もうゴエモン風呂ではなくなり、ガス釜など、現在の一般的なものになっている。設ける場所としては、新築した離れの一角という家が何軒もあった。移動式のユニット

バスのようなものを導入したという家もあった。また、ダイドコ同様に、こちらでもシステムバスが導入されるようになった。

農業の衰退も家屋の変化の大きな原因となった。1970年前後の頃に日谷、直下、曾宇と基盤整備事業が進められ、その後の減反政策も影響して、三谷では自分で田を耕作する人が激減した。例えば1957年に中学を卒業した三谷地区出身者の中で、農業を継ぐ人は1人もいなかったということだ。そのようなわけで、田を持っていても他の大規模な農業経営をしている人に委託したりしている人が見られる。また、油桐の実を拾うことも無くなった。このような状況になってくると、以前農作業場として機能していた広いニワや、農機具を収納してあったアキ小屋が不要となる。

そこで「ニワを2つに仕切って、半分を部屋にした」（1985年）、「若夫婦が暮らす離れを、アキ小屋をつぶして造った」（1989年）というような例も出てきた。このようにして部屋が増えていくのは、後で述べるプライバシー尊重の流れと関係があると思われる。

老朽化も家屋の変化の要因として挙げられる。改修が追いつかないような状態の場合は建て替えがなされるが、現在も伝統的家屋に手入れをしながら住んでいるインフォーマントは、何度も何度も直しながら住んできたと言っていた。大工の方に伺った話でも、三谷地区では建て替えよりはリフォームの方が多いとのことだった。

ある家では、オエの真ん中の梁がたわんできた為に、梁に金具を付けてボルトで締めたりするなどして補強していた。柱や梁として使用されている木材自体は、現在では得難いような太くて立派なものであるのに、手入れをすれば十分住み続けられる。

それでも築80年以上となると、床材が腐って張替えをする家があるそうだ。また、以前の床材が松で、日が当たると松脂が出るということで張替えをしたという家もあった。張替え以前は、年に1度年末に、相当苦勞をして拭き取り掃除をしたということを知った。

## (b) 社会的要因

まず、多人数が集まる場所としての家屋の役割が、他の場所にとって代わられたことが挙げられる。公民館が建てられたり、大聖寺に結婚式場や料亭がつけられたことから、地区の寄り合いや冠婚葬祭、持ち回りで開かれるお講が、個人の家で行われなくなったのだ。家の外で行った場合、多人数が集まるような時に必要なさまざまな準備が楽になるといったこともあるだろう。

特に結婚式は、以前は新郎の家で執り行われる独特の儀礼（嫁入り道具の披露など）もあったのだが、結婚式の簡素化や、タキシードにウエディングドレスといった洋風の結婚式を好む若夫婦が増えたことから、以前のような形式では行われなくなった。

前述したとおり、三谷の伝統的家屋は多人数が集まることを想定した構造となっている。しかし、その役割をなくしたことから、オエなどは家族が普通に暮らしていくのには多少広すぎる空間となった。

そこで、オエを2部屋に区切る家が出てきた。その際にイロリもつぶし、屋根についていた煙抜き穴も塞ぎ、吹き抜けだった場所に天井をつける。この改装を行った時期は、私が聞き取りをした人の中では、1952年頃という人と、1965年という人がいた。オエの仕切り方としては、デイとナンドを仕切る境目をそのまま延長してくる形で二等分していた世帯があった。

1950年前後にイロリが無くなったということは、そのころには暖房としての役割を果たすものが、別に確立されていたであろうということも考えられる。伝統的な家屋は一部屋が大きいために熱効率が悪くて寒いということを前述したが、オエを区切ったことにより部屋の面積が小さくなり、熱効率も良くなった。

また、家の中に家族以外の人あまり出入りしなくなったことが、次に挙げるプライバシーの尊重という考え方と関連があるのではないかと思う。

次に、プライバシーの尊重が考慮されるようになったことについて触れる。前に述べたとおり、伝統的な間取りであった時期には、普段の生活で使用できる空間が狭いために家族が顔を合わせる時間が多く、冠婚葬祭などがあるときには多人数が入り出すような状況で、プライバシーの保護がそれほど問題とされていなかった。そのような、個人単位や家族単位でのプライバシーよりも公が優先される状態から、多人数の出入りの機会が減ったことによって、まず家族全体としてのプライバシーの保持が可能な状況へと変化した。また、現在のような家族の内部でも個人の尊重が求められるような風潮となるにつれて、家に求められるものに、家族単位のプライバシーだけでなく、さらに家族内での個人のプライバシーをも守るという役割が付加されていった。それに合わせて家屋の構造も変化し、現代の一般的な家のように、部屋のそれぞれに独立した役割（居間、子ども部屋、若夫婦の部屋、老夫婦の部屋 など）があてられ、なおかつ個人のスペースの確保が可能な構造へと近づいていくことになった。

個人スペースが必要となり、部屋ごとの役割も分かれてくると、以前よりも多くの部屋が必要となる。そこで、前述したように農業の衰退によって生じた余剰スペースの利用とも結びついていったと思われる。

また、以前は物置として使われていた2階部分や、オエに天井をつけて新しく増えた2階部分を、部屋として使えるように作り変えている家もあった。あるインフォーマントの家では、デイ・ナンドの上にあたる部分の改築を1985年、オエの上にあたる部分の改築を1990年代の初めに行ったという。

離れについては、若夫婦とその子どもが住んでいるというケースが多かった。理由としては、やはり老夫婦と若夫婦は干渉し過ぎないような適度な距離をおく方が上手くいく、というようなものだ。このことから、離れは母屋が新築された家である場合にも建てられることが

あるということだった。母屋と行き来がしやすいように渡り廊下で繋がっている家もあれば、そうでない家もある。

これと関連して、老夫婦と若夫婦の同居・別居がある。離れに住むというのは、老夫婦と若夫婦が同居する1つの形であるが、家を新築する際に二世帯住宅を建てる家もある。一方で、別居する世帯も出てきた。しかし、別居と入ってもそれほど離れて暮らす訳ではなく、遠くても同じ地区の範囲が大半だということだった。

それから、住民の高齢化も家屋に変化をもたらしている。大工の方に伺った話では、段差を無くしたり小さくしたりするなどのバリアフリー化をする家が出てきており、改築の場合などで既成の部品を組み込むことが出来ない場合は、その家に合わせた部品などをつくるそうだ。

## 2. 新しい家と古い家

家屋が新築されるときに、古い家屋を取り壊して更地にしてから建てる場合もあるが、古い家を残しておいて、同じ敷地内もしくは同じ町内に新しい家を建てる場合が多いようだ。結果として、新築した家が「離れ」という扱いになったり、古い家が貸家とされる。古い家が残される理由としては、壊して更地にすると費用がかさむということがあげられていた。

新しい家は現代的な家であるので、住む人の事情や好みによって間取りなどは千差万別となる。ただ共通していることは、やはり仏間がつくられていて、その床が家中で一番高いようになっていくということだ。以前よりは多少狭くなってはいるが、従来通りの大きな仏壇がきちんと納められている。若夫婦が住む家にも、仏間はつくられる。家の中の他の部分がどんどん様変わりをしていった中で、仏間は形を変えながらもしっかりと残されているところに、宗教が三谷の人々に深く根ざしているということがよく分かった。

次に、今も残されている古い家についてである。デイは今でも普段は使わず、身内だけでおこなわれる法事やウチボンコの時などに使うようだった。カギノマは、現在でも法事の時に僧侶が控え室として使う。しかし、車が普及して移動が楽になったので、以前のように僧侶が泊まっていたことはなくなった。

現在でも住み続けられている古い家は、どれもが老朽化した場所を直したり、暮らしやすいように手が加えられていた。様々な場所に繰り返し手を入れていく必要があるわけだが、あるインフォーマントは、そこまでして住み続けるのは、「もうこのような家は造ることが出来ないから、可能な限り残しておきたい」という気持ちからだと言っていた。新しく古い間取りの家を造ることが出来ない理由は、生活様式が昔とは一変していることと、広い部屋をもつ大きな家を支えられるような建材が容易には手に入らないということが挙げられる。離れを建てずに暮らしている別のインフォーマントから伺ったのは、「家が大きいので、中を改造するという考え方で暮らしてきた」とい

うことだ。直さねばならない所が多くあったりすると、いっそ全て新しくしてしまったほうが楽なように思えてくるが、それをせずに古い家で暮らし続けるというのは簡単なことではないと感じた。

#### IV. おわりに

三谷の家の変化を見てきて、いくつか思ったことがある。

まずはダイドコに関連してのことだ。ダイドコが無かった頃はイロリ端で女性は小さくなって家事をしていたのだが、そのうちにニワにダイドコが出来た。そして、その面積が広がっていくと共に、様々な電化製品や設備が導入されて、今のようなダイドコになった。このことには、二つの意味があるのではないかと思う。ただ単に狭かった場所を広くして使いやすくしたというだけではなく、女性の働く場所の確保という意味では女性の地位の向上であり、また、衣食住という生活の基本要素と密接に関る場所の確保という意味では「住む」ということが重視されるようになったことも表しているのではないか。

次に、家の中に多くの人が入り出りしていた頃と、老夫婦・若夫婦の別居も見られるようになった現在では、プライバシーに関する意識に相当大きな変化があるということだ。どちらが良い悪いということはないが、現在までの間に、個人という存在に必要な空間が広がったのだと感じた。それでも、調査中にしばしば近所同士のお年寄りが行き来している様子をみかけたりしたので、地域の連帯感のようなものも残っているのだろう。「遠くの親戚より隣の他人」という言葉がまだ生きている土地柄が維持されているのは、近所に新規居住者が入ってくることが殆ど無いということは理由に挙げられるだろうが、今の社会状況から見ると貴重なことだと感じた。

また、調査中に会った三谷の高齢者の方は、皆かくしゃくとしているという印象を受けていたので、家屋のバリアフリー化の話聞いたときには少なからず驚いた。しかし言われてみると、高齢化の進行に伴う建物のバリアフリー化は社会的な風潮であるのだから、高齢者が多く住む三谷には当然必要なことなのだ。三谷では若者の流出による高齢化が起こっているので、今後は家屋のバリアフリー化がより顕著に進むのではないかと思う。

それから、今回私がこのテーマを選ぶきっかけとなったのが、現在でも古い家に住み続けている方に話を伺ったときに、その方が自分の家に誇りを持っている様子だった。「この柱、太いでしょう？」と言っていた時の笑顔は今でも覚えている。別のインフォーマントが、「こういう家は寒いんですよ」と言っていたように、古い家に住むことは多少の不便も伴うために簡単なことではない。それでも、使えるものは直して使い、一度壊してしまったら再び取り戻すことは出来ない家であることを認めて、今後も出来るだけ残していきたいと考えているというのは、すごいことだと思う。

現在の社会では、携帯電話もパソコンも、日進月歩の技術によって次々新しいものが生まれてくるし、家屋も短期間で新築できるものや、光が家中に取り込めるような洒落た洋風建築がぞくぞく現れてきている。このような状況下では、古い家を残している人の考え方に、学ぶところが多いように感じた。古い家を保存し住み続けていくことは楽なことではないと思うけれども、今後も出来るだけ長く残していってもらえるように願っている。